

日立市におけるレジャー施設の利用者特性

－かみね動物園を事例に－

齋藤讓司・全 志英・上坂元紀・吉原 遼
艾 博翰・中尾浩子・松井圭介

キーワード：レジャー行動，動物園，時空間的特性，地方工業都市，日立市

I はじめに

レジャー行動（余暇活動）とは，経済活動によって得られた自由な時間に行う様々な行動を指し，しばしばレクリエーション活動と同義に使用される。このレジャー行動は観光行動とともに，その空間的な広がりや地理学研究の対象とされており，様々な研究がなされてきた¹⁾（浮田 2004）。例えば，若生ほか（2001）は，仙台市に居住する女性の観光行動空間を調査し，ライフステージと観光行動空間の関係性を明らかにした。また，杜ほか（2003）は中国南京市に居住する大学生の観光行動を調査し，その空間構造を明らかにした。

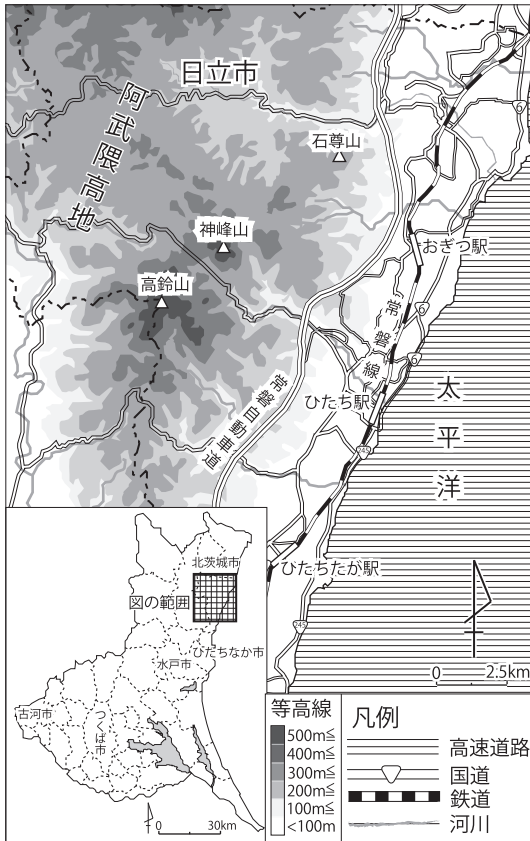
これらの研究で調査対象とされるのは大都市居住者である。大都市はレジャー行動を行う人の送出地であるとともに重要な受入地でもあるため，前述のような大都市居住者を対象とする観光行動研究が行われ，研究成果が蓄積されてきた。一方で，地方都市住民のレジャー行動では，高橋・高林（1987）の浜松市の事例や落合（1991）の神奈川県中西部の事例が報告されているものの，これまで関心が寄せられることは少なかった。レジャー行動が行われる余暇利用圏は距離逓減効果があり（山本ほか 1998），宿泊を伴わないレジャー行動という視点では，大都市との距離が離れるほど，地方都市と大都市の結合は弱くなり，地方都市住民が大都市でレジャー行動をする頻度は少な

くなることが知られている。

茨城県北部に位置する日立市は日立鉱山・日立製作所の鉱工業の発展を基盤として都市に成長してきた典型的な企業城下町である（岩間 2009）。これまで企業を中心に行政・産業などが連動し，産業地域社会を形成してきた。2005年の国勢調査では，就業人口約8.7万人のうち，製造業従事者は30%を占め，産業大分類別就業者数において最多である。工業都市では，製造業を中心とする第二次産業や対事業者サービス業に産業の基盤を有し，観光産業への関心は相対的に低い傾向があるが，近年では，工場群などの工業景観やものづくりの伝統を経験・学習型の観光資源として活用する試みが全国各地の自治体で行われている。

一方，工業都市では，多くの工場労働者が居住しているため彼らが余暇を過ごす上で多様なレジャー行動が行われていると予想される。日立市は，東京大都市圏の縁辺部にあたり，都心からは約130kmの位置にある地方都市でもあるため，前述のような理由から大都市でレジャー行動をする頻度は少なく，居住地周辺でのレジャー行動が大都市に近接する郊外都市住民よりも相対的に重要であることが推察される。

日立市は茨城県の北東部に位置している。東側は太平洋に面し，西側は阿武隈高地の南端にあたり，高鈴山（623m），神峰山（598m），石尊山（386m）が連なっている（第1図）。太平洋岸には海水浴



第1図 研究対象地域
(5万分の1地形図「日立」により作成)

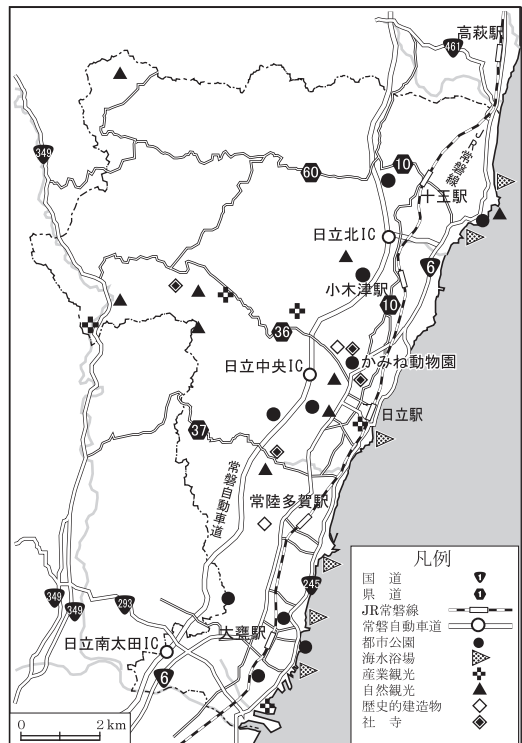
場や宿泊施設があり、阿武隈高地ではハイキングや自然体験ができる施設が立地している。また、日立鉱山の開発と日立製作所の創業によって発展してきたことから、日立市にはそれを象徴する産業遺産も市内に点在している(第2図)。

日立市にはレジャーの対象になりうる自然・文化資源が多数存在しているが、その中心となるのはかみね動物園である。かみね動物園は1957年に北関東地域で最初に開園した動物園である。かみね動物園は観桜で賑わい、温水プール等を有するかみね公園の敷地内にあり、日立市におけるレジャーの中心地と言える。

日立市において、特定のレジャー施設に焦点をあて、その利用者特性を読み解くことは、観光産業の発達は今後期待される地方工業都市におい

て、住民のレジャー行動やレジャー施設の存在意義を検討する好例になる。動物園施設に注目した地理学的研究では、上野動物園と多摩動物園来園者の園内行動を調査した有馬(2010)がある。また動物園と地方行政、観光政策という点では、北海道旭川市の旭山動物園を対象とした研究が蓄積されている(品田 2008; 2009, 原 2006など)。本稿はかみね動物園の利用者特性を明らかにした上で、地域での意義について言及するものである。かみね動物園は日本各地で散見される苦境にある地方都市の動物園の一つであり、その利用者特性から地域での意義を明らかにすることは有意義であると考えられる。

そこで、本研究では東京大都市圏の縁辺部に位置し工業都市でもある日立市において、レジャーの中心施設であるかみね動物園の利用者特性を明らかにし、地方都市におけるレジャー施設の存在意義について考察することを目的とする。



第2図 日立市における観光資源の分布
(日立市観光協会(2010)により作成)

本稿ではまず、レジャー施設としての動物園の発達過程を歴史的にまとめ、日本における動物園の現状を述べる(Ⅱ章)。次に日立市における観光資源の分布、観光動態、観光行政の取り組みを聞き取り調査から明らかにし、日立市の観光の実態を述べる。その中でかみね動物園の重要性を指摘する(Ⅲ章)。そして、かみね動物園の来園者に対して実施したアンケート調査に基づき、かみね動物園の利用実態を時空間的に明らかにする(Ⅳ章)。対面式のアンケート調査は2011年5月28日(月)から6月4日(土)の連続する6日間にかみね動物園内で実施し、206件の回答を得た。

Ⅱ 日本におけるレジャー施設としての動物園の状況

Ⅱ-1 日本における動物園の歴史的展開

第1表は日本における動物園の歴史的展開の概況である。日本において動物園が最初に立地したのは、1882年に開設された農商務省博物館博物館附属動物園(現上野動物園)である。開設当時の展示は1872、1873年に開催されたウィーン万国博覧会に出展した動物たちを鳥獣室、鹿猪室、丸池水鳥室、孔雀室、八角鳥室、水牛室、山羊の畜養所などに分け、木造の施設で展示していた(若生

2010)。

その後、明治中期から大正期にかけて京都、大阪、名古屋で開催された勸業博覧会の会場跡地が都市公園として整備されると、同地に動物園や博物館、美術館が建設された。例えば京都市では、1903年に京都市記念動物園が開設された。京都市記念動物園は上野動物園を参考に、宮内庁から下賜された動物を中心とした展示構成であった。大阪市には1909年に天王寺公園が開園し、1915年に公園内に大阪市立天王寺動物園が開園した。名古屋市では1918年に舞鶴公園附属動物園が開園し、展示動物は以前より市内で開設されていた私設の動物園から移されたものを中心に構成されていた。多くの場合、都市公園の中に動物園が併設され、この時期は日本における動物園の萌芽期とも言え、本稿では動物園の初期段階と位置づける。

これら初期の公設動物園とは別に、鉄道会社の資本により設立された動物園が関西地域で増加し始めた。天王寺公園の隣に開設された遊園地ルナパーク内の動物園や、阪神電鉄による香櫨園遊園地こうろえんの動物園がその代表例である。香櫨園遊園地は動物園や博物館のほかにボートやメリーゴーラウンドなどの大型遊戯施設も設置された。展示動物もオランウータンやゾウ、ライオン、ホッキョクグマなど、上野動物園に匹敵する人気動物をそろ

第1表 日本における動物園の展開

初期	都市公園と併設した近代的動物園の開園	1882年 農商務省博物館博物館附属動物園が開園 1903年 京都市記念動物園が開園 1915年 天王寺動物園が開園 1918年 舞鶴公園附属動物園が開園
発展期	遊園地型動物園の登場と無柵式展示の発達	1928年 上野動物園の一部の動物で無柵式展示が開始 1932年 遊園地内に動物園を併設した阪神パークが開園 1937年 東山動物園(旧舞鶴動物園)がパノラマ展示を開始
縮小期	戦時体制	1938年 軍事動物感謝祭および軍犬・軍馬演習 猛獣を中心とした動物の殺処分
再興期	動物園の戦後復興と全国での動物園の開園	1948年 上野動物園で子供動物園が開設 1950年 上野動物園による移動動物園が東日本巡業を開始 1955年 株式会社日本動物園が世界動物博覧会として西日本を巡業 1970年 教育施設として子供連れを中心に最盛期を迎える 1980年 他の余暇施設の増加から来園者が減少
転換期	環境エンリッチメントによる展示方法の変化	1996年 上野動物園でゴリラ舎を生態的展示へ転換 1997年 旭山動物園が園内全体を行動展示へ移行開始 2000年 多摩動物公園でチンパンジー舎を行動展示へ転換 天王寺動物園で生息環境展示「サバンナ」が開園 2004年 旭山動物園が行動展示施設「あざらし館」を開園

(若生(2010)により作成)

えていた。1910年には箕面有馬電気軌道が香櫨園遊園地から譲り受けた動物を元に箕面動物園を開設し、ここにも遊園地が併設された。その後、鉄道会社資本による遊園地併設の動物園は1932年に開園した阪神パークのように大正期から昭和初期に増加し、全国で5カ所となった。美術館や博物館と同様に来園者がほとんど大人だった公設の動物園に対し、遊園地を併設し、娯楽施設として造られた動物園は「遊園地型動物園」として子どもを対象とした新しい動物園の市場を開き、来園者は家族連れが増加した。

一方、同時期に動物の展示方法の工夫が各所で行われるようになる。1928年には上野動物園、1937年には名古屋市の東山動物園で展示ゲージの柵を排除した無柵式展示が登場した。来園者は柵によって視界を遮られることなく、動物を見ることができるようになった。また、これまで連携が不十分であった動物学者との関係の構築から、飼育方法や調教も進歩し、動物による芸などが動物園の目玉として積極的に取り組まれるようになった(中川 1975)。このような遊園地型動物園の登場と展示方法の進歩を動物園の発展期とする。

しかし、1938年以降、戦時体制に入ると動物園の運営が非常に厳しくなった。軍用動物感謝祭では軍馬や軍犬の演習が行われるようになり、動物園は戦時体制下の宣伝機関として使われるようになった。戦争の激化に伴い、動物園の施設も軍によって強制接収され、猛獣や大型動物を中心に殺処分が行われた。戦時体制下の動物園縮小期である。

戦後、動物園の再興が本格的に始められた。きっかけとなったのは1948年、上野動物園内に子どもの情操教育を目的とした子供動物園が開設されたことである(小森 1997)。戦時中に激減した動物は、国際親善の一環として海外から寄贈されるようになり、これらの動物を中心に移動動物園が組織された。1950年に関東地域を中心に巡業を開始し、1955年までの間に関西地域でも巡業を行った。この移動動物園は、ゾウ17頭、ライオン35頭など大規模なもので、全国での動物園開園のきっかけ

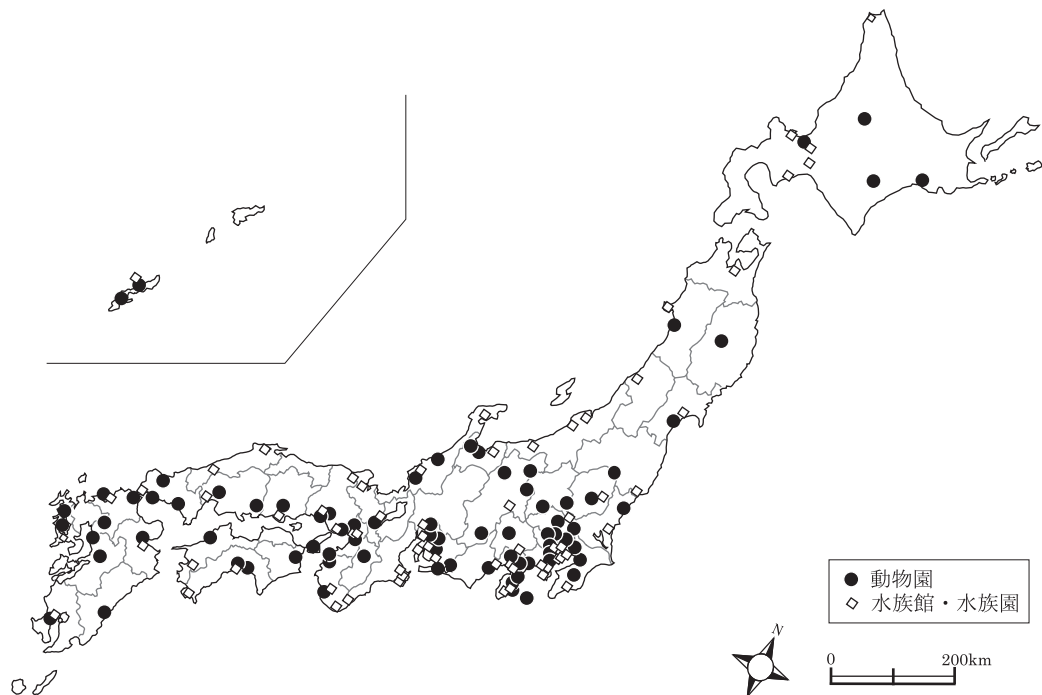
となった。1950年から1955年にかけて全国で24の動物園が開園している。この時期に開園した動物園の多くが遊園地を併設しており、戦前に流行した鉄道会社資本の「遊園地型動物園」が公設の動物園にも普及したと言える。その後も動物園の開園が相次ぎ、1950年代に20、1960年代に11の動物園が開設された。戦後復興から全国に動物園が開園したこの時期は動物園の再興期と言える。本稿で研究対象とするかみね動物園は日立市営の公設動物園であり、この再興期に開園した動物園の一例である。

しかし、1980年代以降、経済成長に合わせて娯楽が多様化し、動物園の来園者数は全国的に低迷し始める。これを契機として近年では、動物園は大型遊戯施設と一部の人気動物に頼った「遊園地型動物園」から脱却し、動物の保護、または教育の機関としての役割をめざし、展示・飼育方法が変化し始めている。1996年には上野動物園でゴリラの生態展示が行われ、1997年には旭川市立旭山動物園で動物の生態展示が導入された。大阪市立天王寺動物園でも2000年に改革が行われ、いずれも動物園の来園者を増加させる契機となった。このように展示方法が変化しつつある現在の動物園は転換期であると考えられる。この潮流は現在のかみね動物園においてもみられる。

II-2 日本における動物園の現状

現在、日本には公設と私設を合わせて87の動物園が立地している(第3図)。その多くが東京大都市圏、名古屋大都市圏、京阪神大都市圏に立地しているが、山陰地方や東北地方の一部を除き、各都道府県に立地している。これらの動物園は前述したように1950年以降の動物園ブームにより開園したものが多く施設の老朽化がかなり進んでいる。1980年代後半からは全国でテーマパークの開園や大型ショッピングセンターの進出など、レジャーが多様化し、動物園離れが一気に加速した。

例えば、上野動物園では1949年のジャイアントパンダの展示を契機に年間来園者数が300万人前後で推移していた。しかし、1990年代以降、来園



第3図 日本における動物園と水族館の分布（2011年）

（日本動物園水族館協会ホームページにより作成）

者数は減少傾向に転じ、2008年にジャイアントパンダが死亡してからは来園者が約270万人にまで減少した。2010年の来園者数は約260万人である。

特に、地方都市における動物園の経営は苦境の状態が続いている。施設の維持管理にコストがかかる動物園は地方財政にとって負担となる場合が多い。2003年に指定管理者制度ができてからは運営を民間に委託する地方動物園が増加している。また、園内施設の維持活動にはNPO法人やシルバーセンターとの連携を図る動物園も増えている。運営費の経費削減をしながらも飼育員が動物の飼育に集中することができるような工夫もみられる。集客を目指す取り組みとして、園内の解説板を担当飼育員が手書きで作成したり、夏休みの時期にはイベントを開催したりしている。飼育員も動物園のPRにつながる展示やイベント企画に積極的に取り組んでいる。

Ⅲ 日立市における観光産業の状況

日立市は企業城下町として知られ、市内には日立製作所と関連工場、さらにその下請工場が集積する工業都市である。日立市観光振興課によると、日立市は産業の町であり、観光産業に対してはこれまで積極的でなかったという。また日立市民の中でも「働く町」のイメージが強く、観光が成り立つ地域ではないと認識している住民が多いことが推察され、聞き取り調査によると、市民の多くは余暇を過ごすために市外のレジャー施設を利用している。しかし、そのような状況下でもレジャーの対象となりうる資源は市内に点在している。そこで本章ではまず、日立市内に点在する観光資源について概観する。

Ⅲ－１ 観光資源の分布

1) 産業観光資源

①日鉱記念館

日鉱記念館は日立鉱山跡地に建てられ、日立鉱山の歴史を展示した産業資料館である。日立鉱山は1905年、久原房之助くはらふきのすけにより開発が始められ、1981年に閉山した。そして1985年、創業80周年の記念として、鉱山跡地に日鉱記念館が建設された。本館では、新日鉱グループ²⁾の歴史、模擬坑道、日立鉱山の発展、鉱山町のくらし、日立の大煙突、新日鉱グループの現況という6つの展示室が設けられている。屋外には、旧久原本部³⁾や鉱山資料館などの史跡と施設がある。日鉱記念館は企業経営と自然保護の学習の場として多くの人々に利用されている。

②日立の大煙突

日立鉱山の開発と成長に伴い、日立の市街地では大規模な煙害問題が広がっていた。久原房之助は周辺住民への補償を行うと同時に煙害対策の調査と研究に取り組んでいた。その対策の一つが煙突の建設であった。当初は3本の煙突が建てられたが、顕著な効果が得られなかったため、上層気流を調査した上で高さ155.7mの大煙突を9カ月かけて建設した。この4本目の煙突は大煙突と呼ばれている。1993年に大煙突は下部の54mを残して倒壊してしまったが、今なお日立市の象徴として親しまれている。

③中里発電所

中里発電所は1907年に完成した水力発電所で日立鉱山へ送電していた。現在は東京電力の管理下で稼働中であり、茨城県内に現存する最古の水力発電所である。

④小平記念館

小平記念館は日立製作所の創業者である小平浪平の功績と日立製作所の歴史を展示する資料館である。記念館内には小平氏所縁の品物の展示の他、日立製作所の製品や技術発展の軌跡を記録した資

料や写真なども展示されている。特に日立製作所における第一号製品である「5馬力誘導電動機とその設計図」は茨城県指定文化財となっている。その他、記念館北側には創業当時の様子を再現した「創業小屋」が復元されている。

2) 自然体験型観光資源

①かみね公園

かみね公園は自然の丘陵地を生かして造園された都市公園で1957年に開園した。敷地面積は15万㎡で日立市中心部に位置し、頂上の展望台から市街地や太平洋、阿武隈高地の山並みが眺望できる。園内にはかみね動物園と遊園地、温水プールなどの施設が立地しており、2004年には吉田正音楽記念館⁴⁾が開館した。また、かみね公園は桜の名所としても有名であり「日本のさくら名所100選⁵⁾」にも指定されている。

②奥日立きららの里

奥日立きららの里は茨城県と日立市が共同で計画した自然体験型レクリエーション施設である。牧場の跡地に整備され、敷地面積は約48haである。広大かつ起伏に富んだ園内には遊戯施設や宿泊施設が設置されている。例えば、全長1188mで日本一の長さを誇る「ワクワクスライダー」や、動物と間近でふれあえる「ふれあい牧場」、別荘タイプの宿泊施設などである。また園内からは日光・那須連山や筑波山、富士山を眺望できる。

3) マリンスポーツ型観光資源

日立市は南北に長細く、太平洋に面する長い海岸線を有する。海岸沿いには北から伊師浜、川尻、会瀬おおせ、河原子、水木、久慈浜の6つの海水浴場が分布している。その中で特に海水浴客が訪れているのが、伊師浜、河原子、久慈浜である。海水浴場の開設期間は7月中旬から8月下旬である。

伊師浜海水浴場は日立市北部の十王地域に位置し、国民宿舎「鶴の岬」と日帰り温泉施設に近接している。国民宿舎「鶴の岬」は伊師浜海岸の海食崖上に位置している。国民宿舎「鶴の岬」のサー

ビス、白砂青松の景観、地元の新鮮な素材を活かした料理は利用者から高く評価され、宿泊利用率で22年間連続全国1位(2010年現在)を記録した。「鶴来(つるら)湯十王」は2001年に営業を開始した日帰り天然温泉施設である。この温泉は地下1300mから自噴している。他方、海食崖が連続する伊師浜海岸はウミウの休憩地となっている。伊師浜には「ウミウ捕獲場」があり、ここでは岐阜県長良川をはじめ、全国11カ所の鶴飼いに使われるウミウを供給している。捕獲場は一般公開されており、鶴捕獲匠からウミウの生態や捕獲方法について聞くことができる。

河原水海水浴場は日立市内の海水浴場の中でも最も歴史が古く、江戸期半ばには海水浴客が訪れていたことが記録されている。周辺には旅館や民宿などの宿泊施設が集積し、夏季には海上花火大会が実施されている。また河原水海水浴場は、海底地形の影響で沖合の波が高く、サーフィンにも適しているという。河原水で民宿を営む経営者からの聞き取りでは、来客者の約40%がサーフィンを目的に訪れるという。河原水では、1975年と2010年にサーフィンの全国大会を実施しており、日立市においてマリンスポーツ観光の中心であるといえる。

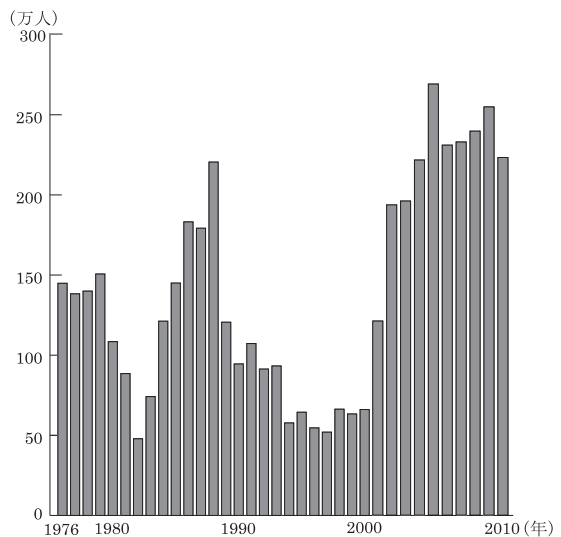
日立市の中で最も海水浴客が多い海水浴場が南部に位置する久慈浜海水浴場である。久慈浜は首都圏から最も近く、常磐自動車道の日立南太田インターチェンジにも隣接している。交通の利便性が高いことから、海水浴客が多いという。海水浴はレジャー施設の少ない日立市にとって重要な観光資源となっている。

以上のように日立市には産業観光資源、自然体験型観光資源、マリンスポーツ型観光資源が市内に点在している。しかし、日立市観光振興課によると、それぞれの観光資源は繋がりがなく、観光客が市内の観光資源を周遊するような状態になっていないという。また、かみね動物園来園者からの聞き取りでは、多くの来園者がかみね動物園の訪問のみを目的としており、その前後に他の観光資源を訪れることはなかった。これは、どの観光

資源を訪れる観光客にも共通の傾向であるという。観光産業の振興には、市内の観光資源を巡るような仕組みや各施設間での連携が課題であると言える。

Ⅲ-2 観光客の入込数とその目的

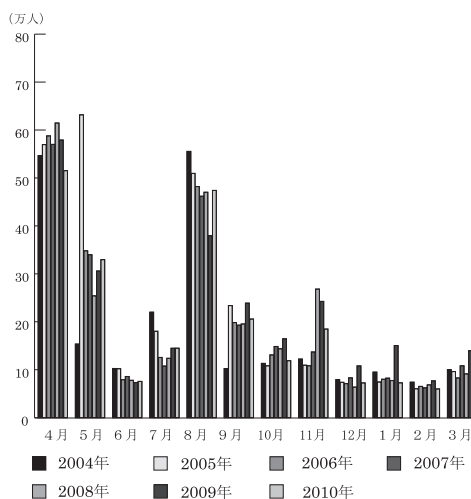
第4図は1976年から2010年までの日立市における観光客入込数を示したものである。1970年代、観光客入込数は140万人程度で推移しているが、その後は急激な減少傾向を示し、1982年には47万人まで落ち込んだ。1980年代後半以降、観光客数は再び増加に転じ、1985年には144万人まで回復した。1980年代前半の減少は天候不順による海水浴客の大幅減少が影響していると考えられる。1988年には観光客入込数は220万人に達し、過去最高を記録している。しかし1990年代以降、バブル経済の崩壊に伴う不況の影響で観光客数は著しく減少した。また、この時期にも天候不順による海水浴客の大幅な減少があり、観光客数は大きく低迷したという。以降、観光客入込数は60万人前後で推移している。しかし2001年以降は再び回復傾向にあり、2004年には1980年代の水準にまで回復し、2005年には270万人が観光で来訪した。



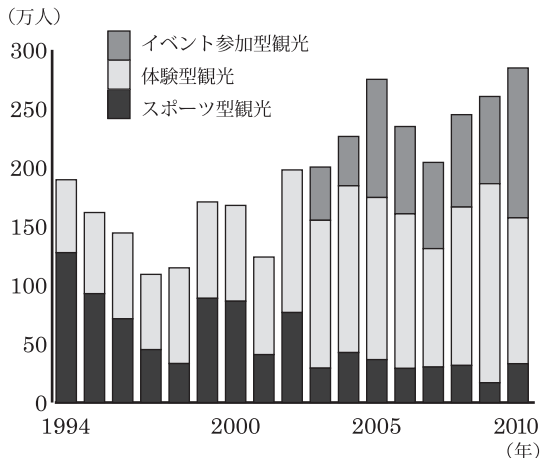
第4図 日立市における観光客入込数の推移
(「日立市産業経済部資料」および「茨城県観光動態調査」により作成)

第5図は2004年から2010年の日立市における観光客入込数の推移を月別に示したものである。日立市を訪れる観光客は4、5月と8月に集中する傾向にある。これは、4月に行われる「日立さくらまつり」と5月に行われる「ひたち国際大道芸⁶⁾」への来場者が県外から多く訪れるからである。また8月には海水浴や河原子における海上花火大会を始め、各地で様々なイベントが開催されている。2005年5月に観光客の急増が目立つが、これはこの年の5月3日から5日にかけて、7年に1回行われる「神峰神社大祭礼」が執り行われたためである。

第6図は2004年から2010年までの観光客入込数の推移を目的別に示したものである。ここでは日立市を訪れる観光客の目的を3つに大別した。文化施設や産業施設での文化体験と、かみね公園や奥日立きららの里における自然体験を目的とする体験型観光、日立市で行われるイベントを目的としたイベント参加型観光、夏季の海水浴やマリンスポーツを目的とするスポーツ型観光である。日立市では体験型観光を目的とする観光客が最も多く、観光客入込数全体の約57%を占める。その次は「日立さくらまつり」、「ひたち国際大道芸」、「よっかっまつり⁷⁾」という日立三大イベントへ訪れるイベント参加型観光の観光客であり、約31%を



第5図 日立市における月別観光客入込数の推移
 (「茨城県観光動態調査」により作成)



注) 1994～2002年は主要イベント入込数のデータ無し

第6図 日立市における目的別観光客入込数
 (「茨城県観光動態調査」により作成)

占める。また、海水浴などのスポーツ型観光を目的として日立市を訪れる観光客は年間入込数の約12%となっている。

日立市観光振興課への聞き取りでは、海水浴の入込数と年間で開催されるイベントへの入込数が日立市の観光客数に大きく影響しているという。前述の通り、海水浴は天候に左右されやすく、天候不順が続くと観光客数は大きく減少する。一方で、「日立さくらまつり」などのイベントはある一定の集客は見込め、実施する価値があると考えている。しかし、日立市は日立製作所の企業城下町であってあくまで「働く町」である。観光産業には積極的でないため、海水浴客が低迷したとしても大きく影響することはないという。しかし、今後は経済状況の変化に伴い、日立製作所の影響力も低下することが懸念されるため、観光客誘致のための政策も検討されるようになってきているという。

Ⅲ-3 観光客誘致のための活動やイベント

日立市は企業城下町という性格から、かみね公園や併設のかみね動物園など、市内のレジャー施設はあくまで日立市民に娯楽を提供する場であった。そのため積極的な観光客誘致はこれまで行われてこなかった。しかし、経済状況の変化から日

立製作所が地域に与える影響が低下する懸念があり、さらに交流人口の拡大や市の活性化のために市外から観光客を誘致する必要がでてきた。市は2004年に観光振興計画を打ち出し、「歴史ある産業・桜・海を活かし、交流と協働で育むもてなしのまち」を理念に観光客の誘致が行われ始めた。

現在、日立市では年間を通して様々な観光イベントが開催されている（第2表）。春季のかみね公園での観桜と夏季の海水浴への集客を主軸に、かみね公園やシビックセンター⁸⁾、河原子海水浴場など、市内各地でイベントが開催されている。

これらのイベントへの観光客誘致のための活動として、観光協会とシビックセンターを母体として「観光キャラバン隊」を編成し、福島県、群馬県、栃木県などを中心に宣伝活動を行っている。また、JR常磐線を中心とした各駅にパンフレットを設

置しているほか、地元新聞や観光情報誌への寄稿を行っている、しかし、観光資源の活用や宣伝活動は十分とは言えず、日立市には観光資源があまり無いと考える市民や市外の人が少ない（日立市2004）。そのため、市では常設の観光案内所の設置や観光ボランティアの育成を行い、観光情報の発信を強化している。

観光振興計画では産業観光にも焦点があてられているが、産業観光の振興には多くの問題が山積している。例えば、産業観光の対象となりうる資源の多くは現在操業中の企業施設であり、不特定多数の来客を目的としたものではない。日立製作所の敷地内にある小平記念館と日鉦記念館への聞き取り調査では、小学校や中学校での社会科見学等の教育活動には応じられるものの基本的に一般の観光客は想定しておらず、あくまで企業関係者の研修施設の一つとして設置されている。そのため積極的な宣伝活動は行われておらず、観光行政との連携も少ない。

一方、日立市は新たな集客手段としてコンベンション事業に取り組んでおり、イベントの誘致を積極的に行っている。近年では河原子海水浴場において全日本サーフィン選手権大会を誘致し、1万2千人の集客があった。このようなイベントの誘致には中心となる施設としてシビックセンターが重要な役割を果たすため、観光振興課ではシビックセンターとの連携を図ろうとしている。一方で、シビックセンターへの聞き取り調査によると、シビックセンターはあくまで市民施設であり、開催される各イベントは地域住民の文化振興事業であると捉えている。各イベントには県外からの観光客も多く、コンベンションとしての機能があることは認識しながらも、観光行政や各団体と連携してコンベンションを振興する経済的・人的余力は少ないと思われる。

日立市では観光客誘致とそれにとまなう地域活性化に対して様々な活動が行われている。しかし、各団体間の連携は少なくそれぞれの思惑は異なっており、日立市全体の効果的な観光振興は未だ発展途上であると言える。

第2表 日立市で開催される年間イベント(2010年)

月	イベント名	開催場所
4	日立さくら祭り	かみね公園ほか
4	日立さくらロードレース	日立新都市市場
5	ひたち国際大道芸	日立会場・多賀会場
5	奥日立きららの里「春まつり」	奥日立きららの里
7	日立港まつり	日立港第5埠頭
7	市内6海水浴場開場	市内海水浴場
7	ひたちサンドアートフェスティバル	河原子海岸
7-8	日立あんどんまつり	かみね公園
8	夜の動物園	かみね動物園
8	河原子海上花火大会	河原子海水浴場
8	十王まつり	十王駅前
8	会瀬夏祭り花火大会	会瀬漁港前多目的広場
9	よかっぺまつり	多賀駅前通り
10	奥日立きららの里「秋まつり」	奥日立きららの里
10	ひたち秋まつり～郷土芸能大祭～	日立新都市市場
10	日立港秋の味覚まつり	おさかなセンター
10-11	かみね公園秋まつり	かみね公園
11	日立市産業祭	日立市市民運動公園
11-12	ヒタチスターライトイルミネーション	日立新都市広場
12	暮市	市内商店街
1	かみね公園正月祭り	かみね公園
1	市民風揚げ大会	久慈川河川敷運動場
3-4	スプリングフェスティバル	かみね公園

（「日立市観光協会資料」により作成）

IV かみね動物園とその来園者の概況

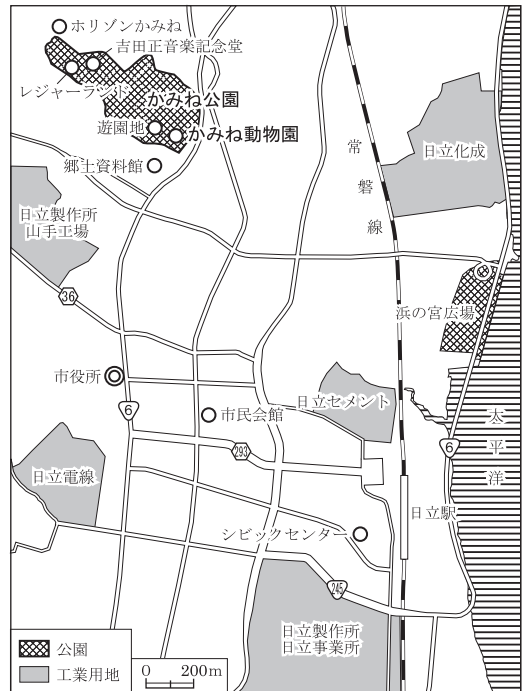
前章で述べた通り、日立市における観光産業は発展途上にあり、今後のさらなる進展が期待される。海水浴では一定の集客があるものの夏季限定の季節的なものであり、天候の影響も受けやすい。そのなかにかみね動物園は恒常的に集客を見込め、日立市ではかみね動物園を市内で最も集客力のある施設として認識している。そのため、かみね動物園は日立市におけるレジャーの中心となる施設と言える。本章では、日立市においてレジャーの中心であるかみね動物園に注目し、その特徴について述べる。

IV-1 かみね動物園の概況

日立市の中心部は日立製作所や日立電線、日立化成といった企業の工場が立地しており、工業用地の占める割合が高い。かみね動物園はその中心部から約2km北側に広がるかみね公園内に設けられた動物園である(第7図)。敷地面積は約4.2万㎡で、北関東地域における最大規模の動物園である。レジャー施設の脆弱な日立市においては、最も集客を期待できる重要な観光資源の一つでもある。

かみね動物園が位置するかみね公園は、1948年に市民公園の造園を目的に着工した。公園を造園するにあたり、1953年に「神峰公園整備促進会」が地域住民を中心に結成され、当時は約700名の会員を集めた。具体的な活動としては、桜や梅などの献木や公園用地の整備作業が会員によって行われた。その後、1956年には都市公園の指定を受けた。

動物園の開園は1957年6月である。都市公園内に動物園を開園することになった詳しい経緯は不明であるが、当時の北関東地域には動物園がなく、地域住民から動物園の開園を望む意見があったようである。また、企業城下町である日立市には娯楽施設がなく、子どもを連れて家族で休日を過ごす場所がなかった。この事情も動物園の開園に影響しているものと思われる。開園当初の名称は



第7図 かみね動物園の位置

(昭文社都市地図により作成)

神峰動物園であったが、1971年に「神峰」を「かみね」とした。開園当時のかみね動物園の敷地面積は1.9万㎡で入園無料であった。1958年5月に日本動物園水族館協会に加盟が認められ、同年の12月から有料施設となった。

かみね動物園は日立市営の公設動物園である。動物園を管理する部門は当初、市の産業部商工水産課であったが、1971年、産業部に観光課が新設されると観光課施設係の所管となった。2010年からは日立市産業経済部のかみね公園管理事務所に所属している。2011年現在、動物園の従業員数は飼育員が13名、獣医が2名で、非正規の従業員が10名である。また動物展示数は100類580点である。

1957年開園のかみね動物園は戦後、全国でみられた動物園開園ブームの一端である。前述の通り、この時期に開園した公設の動物園は「遊園地型動物園」が多かった。かみね動物園も西側に遊園地を併設しており、園内にも子どもが遊べる遊具が2カ所設置されており(第8図)、1950年代に開

園した動物園の典型であると言える。

レジャーが多様化した現在、地方都市における動物園の経営は苦境の状態が続いている。施設の維持管理にコストがかかる動物園は地方財政にとって負担となる場合が多い。このような状況下、地方都市の動物園と言えるかみね動物園では園内のリニューアルや新しい展示ゲージの建設などが行われている。2007年から始まった五カ年計画では約10億円の予算が計上され、市営の動物園でありながら、積極的な取り組みがみられる。経営面では赤字を脱せない状況にあるものの、日立市はかみね動物園を大切なレジャー施設と認識しており動物園の経営にはかなり寛容であると言える。

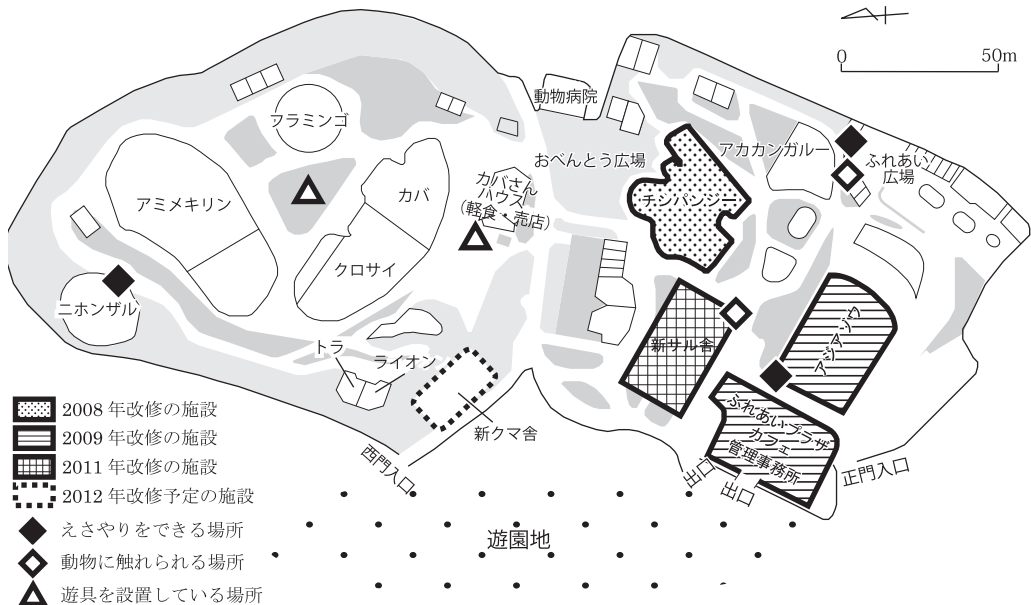
近年では施設の改修に合わせて、さまざまなイベントを行っている。例えば2009年にリニューアルしたゾウの展示ゲージでは、当初からゾウにえさやりをできるスペースを設けている。ゾウのえさやりは有料だが、月曜、木曜、土曜、日曜に1日2回、それ以外の日は1日1回実施している。また2004年より月に1日、「ゾウさんデー」を設定し、飼育員によるゾウの生態の解説やゾウの能力を試すための実演が行われている。担当飼育員

からの聞き取りでは、来園者の多くは動物とのふれあいや給餌体験を喜んでおり、このニーズに応えるために様々な工夫を考えているという。特に小さな子どもが間近で動物を見て触れることを可能にする努力がなされている。

ゾウの他にウサギやモルモットなどの小動物に触れることのできる施設には飼育員が常駐しており、いつでも動物に触れ合うことが可能である(写真1)。また、園内ではゴールデンウィークや夏休みに合わせてスタンプラリーやクイズラリー、飼育員による動物の解説など、来園者を楽しませる様々なイベントが催されている。

Ⅳ-2 かみね動物園における来園者数の推移と展示動物の関係

第9図はかみね動物園が開園した1957年から2009年における年間来園者数の推移である。開園当時、約10万人だった来園者は1960年代には20万人前後まで増加した。来園者数は高度経済成長期に増加を続けるが、これは目玉となる動物への来園者の関心に大きく左右されている。1958年に日本動物園水族館協会に加盟し、有料施設になった



第8図 かみね動物園の状況

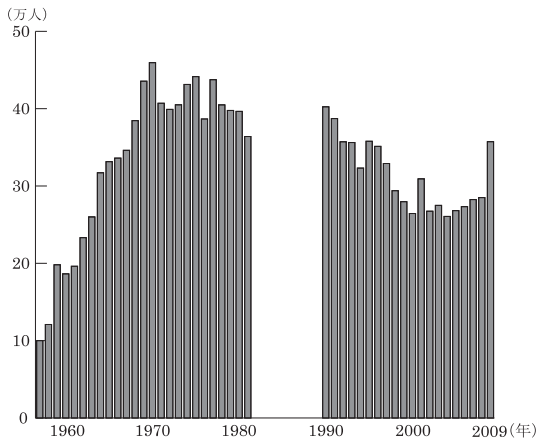
(現地調査により作成)



写真1 動物とのふれあい体験

うさぎやモルモットには常時ふれることができる。また飼育員が常駐している。

(2010年10月齋藤撮影)



注) 1981~1989年のデータは欠損

第9図 かみね動物園来園者数の推移

(「日立市産業経済部資料」および「かみね動物園資料」により作成)

後、毎年のように新たな動物が導入されている。第3表はかみね動物園の歴史的展開である。開園当時はニホンザルやシカ、ツキノワグマの展示であったが、1960年にはカリフォルニアアシカとフタコブラクダが導入され、1962年にはシマウマ、1966年にはチンパンジーとカンガルー、1968年にはサイやカバをはじめ、5種の動物が導入された。このように来園者から一目を引く新しい動物の導入と施設の拡張工事や展示ゲージの新設が行

われ、1965年には年間来園者数が30万人を超えた。1969年にキリンが導入され、1970年に動物園の正門が新設されると年間来園者数は約45万人となりピークを迎えた。

かみね動物園の最盛期は1970~80年代で、年間に40~45万人前後が来園していた。1990年においても約40万人が来園しているが、それ以降は来園者数は減少傾向になる。1998年には30万人を下回り、その後は25~30万人程度で推移している。これはレジャーの多様化により動物園離れが進行したことに加えて1990年以降、新たな動物が導入されていないことも影響しているという。1994年にレッサーパンダが導入されて以降、新たな動物の展示は行われていない。新たな動物を導入すると動物の購入費用や展示ゲージの新設費用がかかる。また、動物保護に関する法律の整備や園内の敷地の問題など様々な障害がある。飼育担当者からの聞き取りでは、他の動物園間での動物の貸借はあるものの、新しい動物を導入することは現実的に難しいという。

しかし、2000年代に停滞した来園者数は、旭山動物園に端を発する動物園ブームとそれに伴うマスコミでの紹介により2005年から漸増傾向を示した。周知の通り、旭山動物園は集客のために新たな動物を導入するのではなく、展示ゲージを更新し、生態展示を導入することで来園者数を急増させたように、かみね動物園では2007年に開園50周年を迎えるに際し、来園者の増加を目指し、大規模なリニューアルを実施することを決定した。前述の通り、2007年より五カ年計画で老朽化した展示ゲージのリニューアルや新設、拡張工事などが行われている。2008年にはチンパンジーの展示ゲージがリニューアルされ、2009年にはゾウの展示ゲージと管理事務室の改装、園内にカフェを新設した(写真2)。さらに2011年にはサルの展示ゲージを新設した。この影響で、2009年には来園者数が大幅に増加し、約36万人が来園している。

かみね動物園園長からの聞き取りでは、五カ年計画終了後も集客のための計画を積極的に取り組んでいくという。例えば動物の繁殖を利用した集

第3表 かみね動物園の歴史的展開

年 月	内 容
1939 5	日立市制実施のための宮田町、助川町合併調査委員覚書に「神峰公園を建設すること」が明記された。
1948 4	市民公園として神峰公園造成着工。
1953 6	地域住民による「神峰公園整備促進会」結成される(会員約700名)。桜、梅等の献木、努力奉仕で公園整備助勢。
1956 4	神峰公園は都市公園の指定を受ける。 児童遊戯施設、野球場、緑地帯等の整備計画が進められて公園中腹にニホンザル、ヤクシカ、ニッポンツキノワグマが展示される。
1957 4	上野動物園長、古賀忠道氏に動物園計画について指導を受ける。 6 将来の発展を期して「神峰動物園」開園(併設)。産業部商工水産課に所属。 8 観光課が新設され、動物園は観光課施設係所管となる。
1958 4	日立市神峰公園協会発足。日立市、商工会議所、観光協会、促進会の四者連合により組織される。便益事業として売店事務を始まる。 5 日本動物園水族館協会に加盟が認められる。 12 動物園は有料施設となる。
1959 5	ウサギの城新設。 7 大水きん舎、小水きん舎、小獣舎、小鳥舎新設。 11 猛獣舎新設。
1960 1	アシカ池新設(カリフォルニアアシカ)。 7 ラクダ舎新設(フタコブラクダ)。
1961 7	鶏舎新設(キン類)。日本動物園水族館協会主催「児童動物画コンクール」で金賞、銀賞受賞者が出る。
1962 3	シマウマ舎新設(グラウンドシマウマ)。遊戯施設「回転ブランコ」新設。
1963 5	児童科学館プラネタリウム開館(市制20周年を記念し、日立製作所からの寄附金)。
1964 3	文部省より、博物館相当施設指定を受ける。ロバ舎新設(ロバ)。
1965 5	動物飼料調理室新設。
1966 5	チンパンジー用仮設ステージ新設。群馬県桐生市(姉妹都市)と児童動物画の交歓展示会を開く。 12 カンガルー舎新設(アカカンガルー)。
1967 4	隣接する神峰市民球場を動物園用地に含めて、動物園拡張工事(三ヶ年計画)始まる。
1968 7	拡張工事。ラマ、バイン舎新設。子供動物園新設。水きん舎、小獣舎、小鳥舎ほか、サイ、カバ舎、フ랑ゴ池。
1969 3	拡張工事。キリン、シマウマ放飼場新設。類人猿舎、サル舎、猛獣舎。動物病院等の新設。 7 機構改革で動物園は神峰公園管理事務所となり、観光課から離れ、課として独立する。
1970 8	正門及び正門事務所新設。 12 神峰公園協会は財団法人の認可を得て、財団法人「日立市公園協会」に名称変更。
1971 3	名称変更。「神峰」を「かみね」とする。神峰公園は「かみね公園」。神峰動物園は「かみね動物園」。
1973 5	動物演芸ステージ新設。本格的調教始める。野外ステージ新設。 7 乾草倉庫新設。
1974 4	動物園内下水道工事始まる。 10 機構改革。「かみね公園管理事務所」から「かみね動物園管理事務所」になる。オオアリクイ舎新設(職員の手作りで完成)。
1975 3	へび放飼場、育すう舎新設(職員の手作りで完成)。
1976 10	子供動物園内に動物と遊ぶコーナー新設(財)日立市公園協会寄贈)。
1977 2	入園者650万人突破。開園20周年記念行事。20年のあゆみ発行、は虫類展、回顧写真展、動物写真画展。
1978 4	シカ舎新設。 5 プレハブ舎新設(育すう兼展示場)。 12 クジャク舎増改築(シロクジャク、マクジャク)。
1979 3	猛きん舎新設(シロハラウミワシ、トビ)。 12 ソウ出入扉電動化。
1980 9	は虫類舎新設。
1981 4	動物園機関紙「ZOOかみね」創刊。 12 熱帯鳥類舎新設。隔離動物舎新設。アライグマ放飼場新設。
1982 5	開園25周年として、ちびっこまつり開催。 10 キョン舎新設。 11 児童遊具新設。
1983 1	正月まつりに多摩動物園より「ジャイアントパンダ(ランラン)」割制借用展示。 7 ヒムネバト、日本動物園水族館協会より繁殖賞受賞。
1984 1	動物園シンボルマーク決まる(日立市日高町、渡辺正一氏デザイン)。 9 総理府、日本動物園水族館協会主催、動物の標語、銀賞に輝く、「ソウさんが僕の絵になる夏休み」。 12 ボニー舎新設。
1986 3	小獣舎新設(ミーアキャット、プレーリードッグ・スカンク)。 8 動物園入園者1000万人突破。
1987 5	ソウ舎増設。 6 30周年記念式典。
1988 3	ツチメンチョウ舎新設。
1993 3	かみね動物園資料館オープン。上野動物園より資料館展示用剥製20点借り受け。
1994 1	レッサーパンダ舎新設。
1996 6	新飼育事務所兼調理室完成。
1997 4	開園40周年記念行事開催。入園者1400万人到達。 10 40周年記念式典を開催。
2000 6	入園者1500万人達成。記念式典実施。
2001 10	写真展「かみねの仲間たち」開催。
2002 5	ソウサンデー開催。 7 クロサイのランド改修工事。
2004 6	日立市環境フェアで「日立のアカウミガメパネル展」開催。
2005 12	かみね公園ファン感謝デーで動物園無料開放。
2006 12	かみね動物園のシンボルキャラクター「かみねっちょ」に決定。
2007 3	かみね動物園フォトコンテスト・シンボルキャラクター展開催。
2008 6	チンパンジー舎がオープン。
2011 4	新サル舎「サル楽園」がオープン。

(日立市(2007)および聞き取り調査により作成)



写真2 リニューアルした正面ゲート

2009年にリニューアルしたゲートには、管理事務所の他、カフェや土産物店、資料室が併設されている。

(2010年10月齋藤撮影)

客である。2011年にかみね動物園ではライオンの赤ちゃんが誕生した際にはメディアで紹介されたことでライオンの赤ちゃんを見るために多くの来園者が訪れた。またチンパンジーの赤ちゃんがテレビ番組の企画で取り上げられた。このような動物の赤ちゃんは新たな動物の導入と同じくらい来園者の関心を引くという。今後はレッサーパンダ、ビーバー、カピバラに繁殖の期待が寄せられており、来園者の増加が期待されている。

IV-3 かみね動物園来園者の概況

ここではかみね動物園の来園者特性についてアンケート調査をもとに述べる。

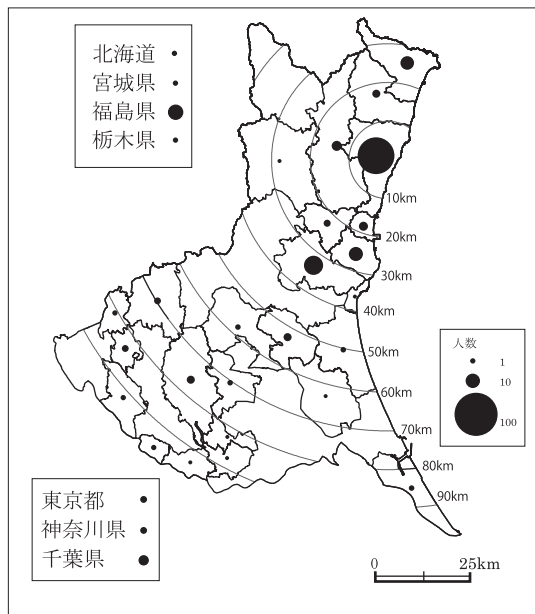
1) かみね動物園来園者の居住地

第10図はかみね動物園来園者の居住地である。かみね動物園の来園者はほとんどが茨城県内の居住者であり、その割合は86.3%を占める。次に多い福島県は5.8%に過ぎず、次いで千葉県の2.5%、東京都と神奈川県が1.0%である。かみね公園管理事務所の担当者からの聞き取りでは、東京都を中心とした南関東地域からの来園者はあまり見かけないという。動物園という視点からは東京都に上野動物園や多摩動物園、神奈川県のアジアなど、飼育展示数が多く敷地も広い動物園が多数

あるためと考えられる。かみね動物園が行う宣伝活動も南関東地域ではほとんど行われておらず、これまでは福島県を中心に行ってきたという。2011年に北関東自動車道が全通したことで、今後は新たな集客を目指し栃木県や群馬県を中心とした北関東地域を中心に宣伝活動を行っていくという。

市町村別でみると、日立市内からの来園者が最も多く38.5%である。次いで水戸市が8.3%、ひたちなか市といわき市がそれぞれ5.8%、北茨城市が4.9%である。これらの市町村はかみね動物園から40km圏内にあり、常磐自動車道や国道6号線を利用すると30分から1時間程度で到達できる範囲である。茨城県内であってもつくば市や土浦市、筑西市などの県南・県西地域からの来園者は少ない。また、かみね動物園から40km圏内であっても阿武隈高地の南端にあり、交通の利便性がよくない常陸大宮市も来園者は少ない。

かみね動物園の来園者のほとんどが自家用車で来園する。その割合は96.7%にもなる。かみね動物園は日立駅から直線距離で約2kmの位置にあ



第10図 かみね動物園来園者の居住地

(アンケート調査により作成)

り、日立駅とは路線バスで結ばれているもののその本数は少ない。一方で国道6号線沿いにあり、常磐自動車道の日立中央インターチェンジとも隣接しているため、自家用車の利用が最も便利であると考えられる。かみね動物園にはかみね公園と共用の大型駐車場が公園内に設けられているが、土曜、日曜、祝日やゴールデンウィーク期間には渋滞が発生する(写真3)。また、公園内に設けられた駐車場は満車になってしまうため、市内にある一般の駐車場を動物園来園者の駐車場として利用するという。その際には一般の駐車場から動物園まで無料のシャトルバスが運行されている。以上、かみね動物園の来園者の居住地をみると、日立市内と、常磐自動車道や国道6号線沿いに位置し、かみね動物園から40km圏内に位置する茨城県北地域および福島県いわき市に居住する者が大半を占めている。このようにかみね動物園の集客圏は約40km圏であり、特定の狭い範囲に集客圏をもつレジャー施設であると言える。

これは団体客の受け入れ状況にも反映されている。かみね動物園では幼稚園や保育園の遠足を始め、団体客を積極的に受け入れている。かみね公園管理事務所の担当者からの聞き取り調査によると、2010年の受け入れが242件で、そのうち茨城県内からの団体客が205件で84.7%を占める。そのうち、日立市内からの団体客が70件(28.9%)であり、次いで水戸市の33件(13.6%)、いわき



写真3 休日で渋滞する来園者の車
(2010年11月齋藤撮影)

市の25件(10.3%)と続く。団体客においても近隣地域からの来園者が大半を占める。特に日立市内やいわき市の幼稚園や保育園は、かみね動物園を遠足に利用する傾向が強いという(写真4)。つまり、これらの日立市および近隣市町村の居住者は幼少の頃に一度はかみね動物園を訪れている可能性が高いことが示唆される。

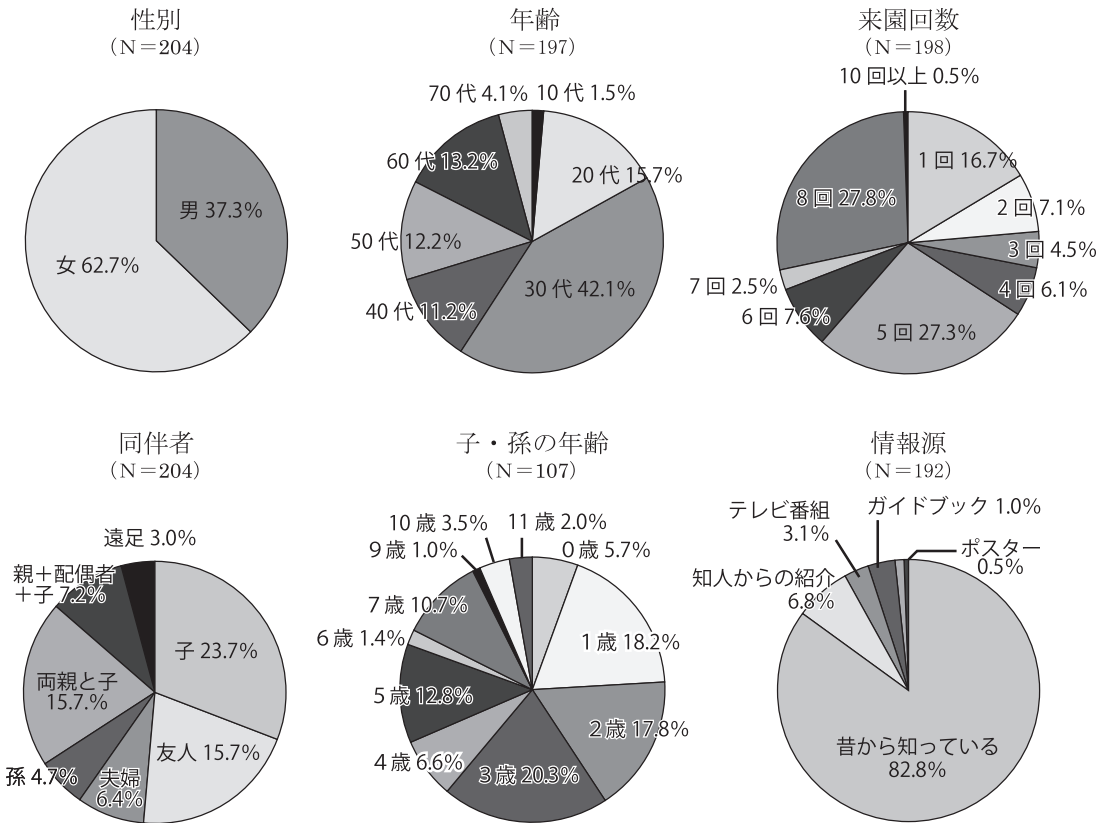
2) かみね動物園来園者の属性と来園回数

かみね動物園の来園者の属性を性別で見ると、男性が37.3%、女性が62.7%である。年齢別では30代が最も多く42.1%である。次いで、20代(15.7%)、60代(13.2%)、50代(12.2%)、40代(11.2%)の順である(第11図)。男女比を年齢別で見ると、20代(76.2%)、30代(62.4%)、50代(85.0%)、60代(71.7%)で女性の割合が目立つ(第12図)。特に20代と30代は幼年の子どもを持つ若い母親である場合が多い。

次にかみね動物園来園者の同伴者について検討する。かみね公園管理事務所の担当者からの聞き取りでは、家族での来園が多く、ほとんどの場合、幼年の子どもを連れて来園しているという。第11図によると、母親または父親が子を連れて来園している割合は23.7%である。両親が子連れで来園している割合は15.7%である。また幼年の孫を連れて来園している場合もみられる。祖母または祖父が孫を連れて来園している割合は4.7%である。さらに

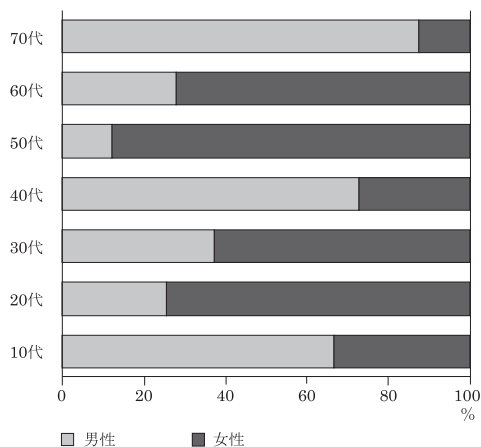


写真4 幼稚園の遠足で訪れる来園者
(2011年5月齋藤撮影)



第11図 かみね動物園来園者の属性

(アンケート調査により作成)



第12図 かみね動物園来園者の性別と年齢

(アンケート調査により作成)

親子三世代で来園している場合もみられ、その割合は7.2%である。つまり、かみね動物園の来園に子または孫を連れてくる割合は51.3%となり過半数を占める。一方、子・孫を連れていない者では、友人との来園が15.7%、夫婦での来園が6.4%、遠足での来園が3.0%である。

連れ子・孫の年齢は3歳が最も多く20.3%を占める。次いで1歳(18.2%)、2歳(17.8%)、5歳(12.8%)、7歳(10.7%)である。最も年齢が高い連れ子・孫は11歳で、それ以上の子・孫を連れてくる来園者はいなかった(第11図)。つまり、かみね動物園に連れていく子・孫は保育園、幼稚園に通う年齢から小学生までの子・孫である。かみね公園管理事務所の担当者からの聞き取りの通り、幼年の子どもを連れて来園する傾向にあると言える。

続いて来園回数について検討する。第11図によると、来園回数では20回以上の来園が27.8%で最も多く、次いで5～10回の27.3%である。5回以上の来園回数がある者は65.7%を占める。一方で初めて来園した者は16.7%に留まる。

来園回数を同伴者別でみたのが第13図である。第13図によると、初めてかみね動物園を訪れた者では友人との来園が最も多く25.0%を占める。次いで夫婦での来園の21.8%である。2回目の来園でも友人との来園が最も多く43.8%であり、次いで夫婦での来園の19.9%である。来園回数が増えるると子や孫を連れて来園する者が増加する傾向にある。3回目の来園で母親または父親が子を連れて来園している割合は17.6%、両親が子を連れて来園している割合は41.2%である。4回目の来園で母親または父親が子を連れて来園している割合は59.0%を占める。

この傾向は来園回数が増えるほど顕著になり、20回以上の来園では母親または父親が子を連れて来園する割合が40.0%、両親が子を連れて来園する割合が10.8%、祖母または祖父が孫を連れて来園する割合が13.3%、親子三世代での来園が14.0%となる。子・孫を連れて来園している割合は78.1%になり、友人との来園は15.0%、夫婦での来園は



写真5 子連れで賑わう園内
(2011年5月中尾撮影)

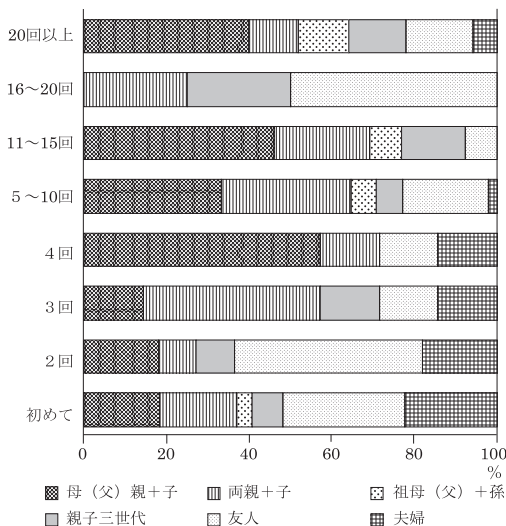
6.9%に留まる。

つまり、かみね動物園には幼年の子や孫を連れて来園している者が高い頻度で来園していることになる(写真5)。30代の来園者が多いのは、幼年の子どもを持つ親の年齢は30代が中心であること、次に60代の来園者が多いのは、幼年の孫を持つ祖父母の年齢は60代が中心であることに起因するものと考えられる。

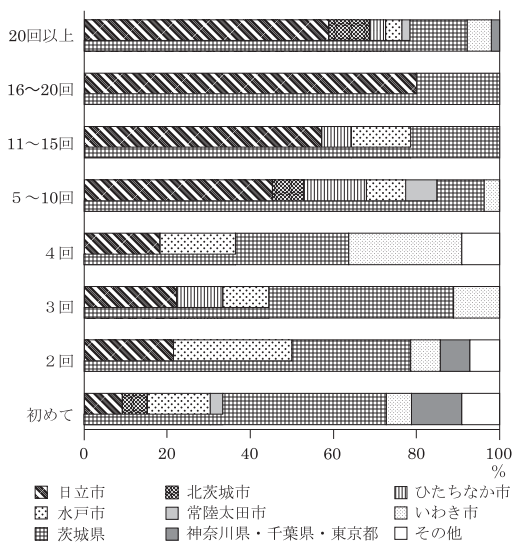
3) かみね動物園来園者の居住地と属性、来園回数の関係

前述のかみね動物園来園者の居住地と来園回数との関係を見ると、来園回数が増えるほど茨城県居住者の割合が増加する。第14図によると、初めてかみね動物園を訪れた来園者のうち、茨城県居住者は73.6%、2回目では79.1%、3回目では88.5%である。4回目で割合は低くなるが、5回以上かみね動物園に来園している者では90%を超え、リピーターの多くが茨城県居住者である。一方、初めての来園者のうち神奈川県、千葉県、東京都の居住者は12.8%、2回目が8.3%で、これ以上の来園回数がある者には南関東地域の居住者はほとんどみられない。

市町村では、初めての来園では水戸市の居住者が18.7%で最も多く、次いで日立市の10.0%、いわき市の8.4%、北茨城市の5.5%である。来園回数が増えるとともに日立市の居住者の割合が増加



第13図 かみね動物園来園者の来園回数と同伴者
(アンケート調査により作成)



第14図 かがみね動物園来園者の居住地と来園回数
(アンケート調査により作成)

する。特に5回以上の来園者に占める日立市居住者の割合は50%を超える。つまり、日立市居住者はかがみね動物園へのリピートが頻繁であると言える。水戸市、北茨城市、ひたちなか市、いわき市の居住者は来園回数が増加するとともにこれらの市町村の居住者の割合が減少する。再訪はするものの、その頻度は日立市居住者に比べるとその頻度は少ないと考えられる。

4) かがみね動物園来園者のコメントからみる利用傾向

ここでは、かがみね動物園来園者に行った聞き取り調査で得られたコメントから、かがみね動物園の利用特性について述べる。

第4表の来園者コメントによれば、「子どもが小さいので遠出はしない。(20代女性)」、「小さい子どもを連れて行ける場所が他にない。(30代女性)」、「東京の動物園は混んでいて子どもを連れて行きにくい。(40代男性)」のように、子連れで外出できる場所が限られるため、かがみね動物園を来園している者が目立つ。そのような状況下であっても、「ゾウのえさやりや動物とふれあえるのがよい。(30代男性)」、「ウサギに触れられる。

(30代女性)」、「動物のえさやりが一番印象に残っている。(20代女性)」のように、動物を間近に見て、実際に動物に触れて、えさやりを行う体験に好意をもつ来園者が目立つ。かがみね動物園は遠出をせずに幼年の子どもを連れて楽しみ、動物を身近に見て、ふれあえる施設として認識されていると言える。

第11図によると、多くの者がかがみね動物園を昔からよく知っていると回答している。その割合は82.8%にも達する。特に来園者の居住地が日立市内でない場合でもかがみね動物園を昔から知っている者が多い。かがみね動物園を昔から知っていて、リピーターが多い理由としては、自分が幼年期に来園した思い出がある場合が多い。第5表の来園者コメントによると、「自分が小さい時に家族と何回も来た。(20代男性)」、「自分たちが子どもの頃によく来ていた。(30代女性)」、「自分が子どもの頃、親に連れてもらってきた。(30代女性)」のように、幼年期の記憶や思い出をたどって来園している。

幼年期の思い出としては、家族での来園の他に、幼稚園や保育園、小学校での遠足の思い出も影響している。「遠足で来たことがある。(20代女性)」、「小さい頃から遠足で来ていた。(20代女性)」、「子どもの頃に遠足で来た。親にも連れてきてもらった。(20代女性)」のように、幼年期の遠足での経験から再び動物園を訪れる傾向がみえる。

また、子を連れてくる来園者のコメントによると、「自分たちが子どもの頃によく来ていて、子どもが生まれてからまたよく来るようになった。(30代女性)」、「小さい頃、親に連れてきてもらって、自分に子どもができたのでまた来た。(20代男性)」のように、幼年期に親に連れられて来園し、自分が親になったため子を連れて来園している。

さらに、孫を連れてくる来園者のコメントによると、「孫をよく連れてくる。昔は息子をつれてきていた。(70代男性)」、「息子が小さい時に来て、今は孫と一緒にくるようになった。(60代男性)」のように、以前から子を連れて来園しており、さらに孫ができたので再び来園している。

第4表 かみね動物園来園者の属性とコメント①

番号	性別	年代	居住地	来園回数	同伴者	来園者コメント
1	女性	—	日立市	20以上	友人	上野は動物が見にくく子どもを遊ばせられなかった。
2	女性	20	北茨城市	1	親子三世代	子どもが小さいので遠出はしない。
3	男性	40	いわき市	1	夫婦	子どもを遊ばせやすい環境だと思う。
4	女性	30	日立市	5-10	子	小さい子どもを連れて行ける場所が他にない。
5	女性	20	常陸大宮市	20以上	親子三世代	子どもが小さく、旅行は無理。
6	男性	40	日立市	11-15	子	上野動物園は混んでいて子どもを連れて行きにくい。
7	男性	40	日立市	11-15	両親十子	子どもが遊び盛りなのでちょうどいい。
8	女性	60	日立市	16-20	—	子どもが小さく、他に遊べる場所がない。
9	男性	30	日立市	1	両親十子	子どもが小さくて遠出ができない。
10	女性	30	水戸市	11-15	両親十子	子どもろ自由に遊ばせられる。
11	女性	30	日立市	20以上	子	子どもが安心して遊べる。
12	男性	30	ひたちなか市	5-10	両親十子	子どもが小さいとあまり遠出できない。
13	女性	20	日立市	20以上	子	動物のえさやりが一番印象に残っている。
14	男性	20	水戸市	1	友人	チンパンジーの展示がおもしろかった。
15	男性	70	—	20以上	子	昔よりもきれいになっている印象。
16	男性	30	那珂市	11-15	両親十子	新しくなって来やすくなった。イメージがよくなった。
17	女性	50	那珂市	11-15	友人	きれいでよくなったと思う。
18	女性	40	日立市	5-10	友人	動物が見やすい。きれいになった。
19	男性	40	いわき市	1	夫婦	動物との距離が近くて見やすい。
20	女性	60	水戸市	20以上	夫婦	リニューアルして動物のにおいが気にならなくなった。
21	女性	30	銚田市	4	両親十子	動物とのふれあいとゾウのえさやりが楽しかった。
22	女性	30	神栖市	2	両親十子	ゾウのえさやりがよかった。うさぎに触れる。子どもが喜んでた。
23	女性	50	東京都	1	—	サイが好きで見に来た。
24	女性	20	日立市	5-10	子	チンパンジーの展示が見やすくてよかった。
25	男性	40	福島市	1	両親十子	動物にえさをあげられるのがよい。
26	女性	30	日立市	5-10	親子三世代	水族館は入園料が高いので動物園の方がよい。
27	男性	40	日立市	11-15	子	入園料が安い。
28	男性	10	常陸太田市	20以上	友人	サルの展示が新しくなってよかった。
29	男性	30	日立市	1	両親十子	思ったより動物の種類が多くてよかった。
30	女性	30	取手市	1	友人	入園料が安い。動物のにおいが気にならないので快適に見られる。
31	男性	30	水戸市	1	友人	リスザルの展示がすごかったし楽しい。
32	女性	30	日立市	16-20	友人	展示数は少ないが間近で見られる。
33	女性	20	ひたちなか市	20以上	友人	チンパンジーの展示がよい。
34	男性	20	水戸市	4	友人	新しい展示がよい。入園料が安い。
35	女性	30	日立市	20以上	子	動物とふれあえるのが楽しい。
36	男性	30	ひたちなか市	5-10	両親十子	ゾウのえさやりや動物とふれあえるのがよい。

注)「—」は不明であることを示す。

(アンケート調査により作成)

来園者の中には親子三世代で来園している人も見られる。「自分が小さい時には母親に連れてきてもらっていた。今は親子3代で来ている。(30代女性)」「義母に誘われて子どもと来た(20代女性)」のように、かつて来園した経験が子から孫へ伝わり、三世代で動物園を楽しんでいる。

かみね動物園の来園者は、自分が幼年期に親に連れられたり、遠足で来園したりした経験を持っている。それは自分が親になったり、孫ができた時に再び来園するきっかけとなっている。

IV かみね動物園の来園者特性

これまで述べてきた、かみね動物園来園者に行ったアンケート調査と聞き取り調査の結果をまとめると次のことが言える。

①かみね動物園の来園者は自動車での来園がほとんどで、日立市内と北茨城市や水戸市、いわき市など自家用車による交通の利便性がよい限定された地域の居住者が大半を占める。②20代から30代の若い母親が幼年の子を連れて来園する傾向がある。また、両親が幼年の子を連れしたり、祖父母が幼年の孫を連れて来園したりする傾向が看取さ

第5表 かみね動物園来園者の属性とコメント②

番号	性別	年代	居住地	来園回数	同伴者	来園者のコメント
1	女性	50	東海村	5-10	子	自分の子が小さい時に連れてきていた。子どもにとって重要なレジャー施設だと思っている。
2	女性	60	日立市	5-10	子	10年くらい来ていなかった。孫ができて連れてきたが、自分だけでは来ないと思う。
3	女性	20	日立市	20以上	子	遠足で来たことがある。
4	女性	30	日立市	11-15	子	子どもが幼稚園に入る前は近所の友達グループでよく来ていた。
5	女性	60	北茨城市	20以上	夫婦	子どもをよく連れて行っていた場所。
6	女性	30	那珂市	3	両親+子	自分の子が小さい時はよく来た。
7	女性	60	日立市	—	友人	自分の子が小さい時はよく来た。
8	女性	—	日立市	20以上	友人	家族でよく来るし、友人同士でもよく来る。
9	男性	30	那珂市	11-15	両親+子	自分が子どものころによく来ていた。半年に1回くらい子どもを連れてくる。
10	女性	50	那珂市	11-15	友人	子どもが小さかった時以来20年ぶりに来た。懐かしい。
11	男性	40	日立市	20以上	子	小さい時によく来ていた。
12	女性	20	北茨城市	1	親子三世代	義母に誘われて子どもと来た。義母は昔に来たことがあるらしい。
13	女性	40	日立市	5-10	友人	孫ができれば連れてきたい。
14	女性	30	日立市	5-10	子	以前に遠足で来たことがある。
15	男性	40	いわき市	1	夫婦	子と孫を連れてきたい。
16	女性	20	常陸太田市	4	両親+子	遠足で自分自身も来園していた。子どもができて連れてきた。
17	女性	50	いわき市	4	夫婦	何年かぶりに来た。昔は子どもをよく連れてきていた。
18	女性	30	日立市	5-10	子	自分が子どもの頃は、遠足や家族とよく来た。
19	男性	20	日立市	20以上	子	自分が小さい時に家族と何回も来た。遠足でも来た。
20	女性	30	日立市	—	子	子どもの頃から親に連れて来られたり、遠足で来たりしていた。
21	女性	20	—	20以上	親子三世代	小さい頃から遠足で来ていた。子どもを動物園に連れて行こうと思い来園。
22	男性	20	北茨城市	5-10	両親+子	小さい頃、親に連れてきてもらって、自分に子どもができたのでまた来た。
23	男性	60	日立市	5-10	孫	息子が小さい時に来て、今は孫と一緒にいるようになった。
24	女性	20	常陸太田市	5-10	友人	親に連れて来られたり遠足で来たことがある。
25	女性	30	日立市	5-10	親子三世代	自分が小さい時には母親に連れてきてもらっていた。今は親子3代できている。
26	男性	30	ひたちなか市	5-10	両親+子	子どもができて初めて来園した。
27	男性	60	日立市	20以上	孫	動物園ができた時から来ている。子を連れてきていたが、今は孫を連れてきている。
28	女性	20	日立市	20以上	子	昔からよく来ている。友人の親子と来ることが多い。
29	男性	30	日立市	11-15	子	子どもを連れて何度も来園している。
30	男性	50	水戸市	5-10	両親+子	子どもが小さい時に2ヵ月に1回くらいできていた。
31	男性	70	日立市	11-15	孫	孫をよく連れてくる。昔は息子を連れてきていた。
32	男性	30	日立市	20以上	子	子どもが生まれてからよく来ている。
33	女性	60	日立市	16-20	—	祖母に連れてきてもらっていた。曾祖母にも連れてきてもらった。今は自分が孫を連れてきている。
34	女性	30	日立市	5-10	両親+子	自分たちが子どもの頃によく来ていて、子どもが生まれてからまたよく来るようになった。
35	男性	10	常陸太田市	20以上	友人	小学生の頃はよく来た。
36	男性	30	日立市	1	両親+子	昔、遠足できた。子どもにとってはおもしろい場所だと思う。
37	男性	30	日立市	5-10	両親+子	親に連れて来られたり、遠足で来た。中学や高校の時には来たことがない。子どもができてまた来た。
38	男性	30	水戸市	1	友人	子どもができれば必ず連れてくる。
39	男性	20	常陸太田市	5-10	友人	小さい頃に来たことがあって懐かしかった。
40	女性	20	ひたちなか市	20以上	友人	子どもの頃に遠足で来た。親にも連れてきてもらった。
41	女性	30	日立市	20以上	子	自分が子どもの頃、親に連れてきてもらった。孫ができれば連れてきたい。

注)「—」は不明であることを示す。

(アンケート調査により作成)

れるが、共通する点は幼年の子どもを同伴していることである。③子どもを連れてくる来園者は、動物を間近で見られる展示や園内で行われる動物へのえさやりやふれあいに満足している。④その多くはリピーターで、かみね動物園に近い地域に

居住している者ほどリピートする傾向は強くなる。⑤そして、リピーターの多くは自分が幼年の頃に親が祖父母に連れられ、あるいは遠足でかみね動物園を訪れており、自分に子ができた時には連れて行きたいと考えている。

かみね動物園は、集客圏の空間的な広がりには狭く、日立市および周辺地域の居住者が幼年期に遊びに来る場所という特性をもち、時間的には自らが幼少の時、自らに幼年の子ができた時、自らに幼年の孫ができた時の3つの時点で来園機会があるという特性をもち、これは、地方都市において、レジャー施設が利用者に子育ての場所として価値を見出され、利用されていると考えられる。

特に地方都市では経営不振や利用者の減少で休業や廃業を余儀なくされるレジャー施設が散見される。その中で、子育ての場所として多くの来園者が何回も再園し、子どもが楽しめるような仕掛けを積極的に行い、利用促進を続けているかみね動物園のような施設は存在価値が高く、地方都市におけるレジャー施設の在り方として好事例であると考えられる。

V おわりに

本研究では工業都市であり、企業城下町である日立市において、レジャー施設の利用者特性をかみね動物園来園者へのアンケート調査と聞き取り調査から明らかにし、地方都市におけるレジャー施設の在り方について言及した。

西部に山地、東部に海岸を有する地勢上の特徴から日立市は豊富な自然資源を有していた。特に海水浴場は多くの観光客が訪れており、年間約60万人もの海水浴客が訪れていた。夏季期間限定であるものの、海水浴は日立市における最大の観光資源となっていた。また、日立市では春から夏にかけて様々なイベントも行われており、これらも重要な観光資源となっていた。一方で、日立市の発展に大きく貢献した日立鉱山や日立製作所に関連した施設は観光資源としての魅力は有するもの

の、現状では教育活動への利用のみにとどまり、観光行政との連携も見られなかった。そのため産業観光は未だ発展途上と言える。このような観光資源を活用するために宣伝活動や観光ガイドの育成などが行われているものの、日立市の観光振興は未だ発展途上である。

そのような状況下、かみね動物園はレジャー施設の少ない日立市において市民の余暇活動において重要な役割を果たしてきた。1990年代には来園者数が減少し、維持管理費が大きな負担になっているものの、特に幼年の子どもをもつ家族にとって重要なレジャー施設と認識されていた。かみね動物園には多くの予算が計上され園内のリニューアルなどが積極的に行われている。

かみね動物園の来園者は茨城県北部と福島県いわき市の居住者が中心であり、集客の空間的広がりには非常に狭かった。また来園者は幼年の子が家族にいる場合に訪れる傾向があり、自身が幼年の時点、自らに幼年の子どもができた時点、自らに幼年の孫ができた時点の3時点での来園機会を有する時間的特性があるという特徴が明らかになった。

東京大都市圏縁辺部に位置し、工業都市である日立市において、遠出ができない幼年の子を持つ家族にとってかみね動物園は重要な施設である。レジャーが多様化する昨今、地方都市の動物園や遊園地、バブル期に乱立したレジャー施設は多額の負債を抱え廃業に追い込まれる場合も少なくない。その中であって、本研究で明らかになったかみね動物園が有する地理学的特徴は、日本の地方都市におけるレジャー施設やレジャー行動のあり方を見直す指標になると期待できるものである。

本稿を作成するにあたり、日立市役所をはじめ、日鉱記念館、日立シビックセンターの皆様には資料提供を賜り、聞き取り調査に応じて頂きました。また、かみね動物園では6日間にわたり園内でアンケート調査をさせて頂きました。生江園長をはじめ、飼育員の方々にも大変お世話になりました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

[注]

- 1) 観光行動はレジャー行動に含まれ、特に1泊以上の宿泊を伴うものを指す。
- 2) 日立鉱山の開発に端を発する金属事業の他、石油精製販売事業と石油開発事業を行う新日本石油を傘下にし、2010年よりJXホールディングスとなった。
- 3) 日立鉱山開業時に創業者である久原房之助が居住していた場所。現在は茨城県指定文化財である。
- 4) 吉田正は日立市出身の作曲家で1998年に国民栄誉賞を受賞した。
- 5) 1990年、財団法人日本さくらの会により国内で100カ所が選定された。他には東京都の上野恩賜公園や大阪市の造幣局などが選ばれている。
- 6) 日立市中心部の商店街や広場を会場に、国内外の団体によるパフォーマンスが披露される。
- 7) 毎年9月に日立市多賀地区で行われる祭りで、市民によるバザーや縁日の出店、市内の学校や団体による舞踊や楽器の演奏が披露される。
- 8) 日立市中心部に位置し、市立図書館、科学館、プラネタリウム、イベントホール、会議室などを備える複合施設で文化活動の中心となっている。

[文 献]

- 有馬貴之 (2010) : 動物園来園者の空間利用とその特性－上野動物園と多摩動物園の比較－. 地理学評論, **83**, 353-374.
- 茨城県商工労働部観光物産課 (2010) : 『茨城県観光動態調査』茨城県.
- 岩間英夫 (2009) : 『日本の産業地域社会の形成』古今書院.
- 浮田典良 (2004) : 『最新地理学用語辞典改訂版』株式会社原書房.
- 落合康弘 (1991) : 神奈川県中西部における余暇圏活動の空間的展開. 経済地理学年報, **37**, 245-265.
- 加藤有次他 (2000) : 『博物館展示法』雄山閣出版.
- 小森 厚 (1997) : 『もう一つの上野動物園史』丸善ライブラリー.
- 佐々木時雄 (1975) : 『動物園の歴史－日本における動物園の成立－』西田書店.
- 品田早苗 (2008) : 観光客の増加が都市に与える影響－旭川市と旭川市旭山動物園を事例として－. 日本都市学会年報, **42**, 151-158.
- 品田早苗 (2009) : 地方行政に観光化される動物園－旭川市旭山動物園を事例として－. 日本都市学会年報, **43**, 250-258.
- 柴田 高 (2010) : 観光事業の顧客価値創造における物語性の効果－旭山動物園と黒川温泉の事業再活性化を例として－. 東京経大会誌 経営学, **268**, 55-66.
- 高橋伸夫・高林清和 (1987) : 浜松市における余暇圏の構造. 人文地理学研究, **2**, 95-108.
- 中川志郎 (1975) : 『動物園学ことはじめ』玉川大学出版.
- 杜国慶・溝尾良隆・張京祥 (2003) : 南京市居住大学生の観光行動に関する地理学的分析. 立教大学観光学部紀要, **5**, 83-96.
- 原 哲子 (2006) : 観光客の『常連化』戦略－旭山動物園の取り組みへの一考察－. 立教ビジネスデザイン研究, **3**, 3-16.
- 日立市 (2007) : 『かみね動物園50周年記念』日立市.
- 日立市 (2008) : 『日立市観光振興計画』日立市.
- 日立市観光協会 (2004) : 『日立市観光交流資源調査報告書』日立市.
- 日立市観光協会 (2010) : 『日立観光ルートガイドブック』日立市.
- 若生謙二 (2010) : 『動物園革命』岩波書店.
- 若生広子・高橋伸夫・松井圭介 (2001) : ライフステージからみた女性の観光行動における空間的特性－仙台市北部住宅地の居住女性を事例として－. 新地理, **49**, 12-33.
- 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚明 (1998) : 『人文地理学辞典』朝倉書店.
- 日本動物園水族館協会公式HP : <http://www.jaza.jp/index.html> (最終閲覧日2011.10.5)
- 旭川市旭山動物園公式HP : <http://www5.city.asahikawa.hokkaido.jp/asahiyamazoo/sc02.html> (最終閲覧

日2011.11.3)

上野動物園公式HP：<http://www.tokyo-zoo.net/zoo/ueno/index.html>（最終閲覧日2011.11.15）

横浜市金沢動物園公式HP：<http://www2.kanazawa-zoo.org/>（最終閲覧日2011.10.4）

大阪市天王寺動物園公式HP：<http://www.jazga.or.jp/tennoji/index.html>（最終閲覧日2011.10.4）

札幌市円山動物園公式HP：<http://www.city.sapporo.jp/zoo/index.html>（最終閲覧日2011.11.15）